

門遠
番 1463
3



日方義卓卷之二

梅の芳雅と揚子伝

此在父必此有子と福山の夢は世野右衛門
右馬次郎とく比類するは勇士のうえ和年
中治義の軍に以て勇まがり出陣しとく
父方義は年々うらとく主人正成と仲小園
に訪ら夏秋の戦ひより見るる右馬次郎細
して敵の首を捕しとく城より敵を逐
小中を死しとく親のえよばへし
父は墓をうつとく辰とりしが嘉らるる梅の方



三十一

泣くかこも中身りしと周章安んずる不
義せし不仕合是此るさ度ふこそとして暴
とかこしけりおのの事ら暴と止る由と
いふ若しうべたと止るりしと死る者
のうらもあつとさう忠神さるは事の云
骨のたぬ波節ハ何と成つらんあを公慶や
と只改らも六波節ハ去るは月毎日の攻め
討死しけるうし所城申はしめゆりしと
いふ妻女ハ五乱し情さるる莫る子新と汁を
りしとさふ不義せしとさぬぞうらめしと怒乃

限りゆ洗む又ハ不真しから義利よりしと莫
やあらせし侍の家小を戦場の討死ハ極の前
浪くゆらハ能仕合さるる莫死さるる場不と逃
ゆらハ何程せしとさるるさう程の莫知し怒ゆ此
あはるるさうさ年よま六死るるものうらおのさ
も公の内ハ恙らりし時よもおさく答らぬと
あはるるさうと外らりハ死せし老よ若らると云
もんいとは情さるる莫らりしと云しとあけ人の云
法の達人ら矢の名人ふとく人を救せし武喜
りしとさふ不義せしとさぬぞうらめしと怒乃

の勅氣とうけく漆川のまろふ皆く整居く
ら莫あらず頃家回教家小玉小割居く莫
るる神女侍従と標し合志家久吉と烟を
斗り久吉志志六津が嶽は志と藥堅くは家回
と押へ自尾垣に致白せんともる家はか堂の一
佐福山池田家回者堂るんども名く武切と能く
んと務る女流家と集焼おのま全の不具家
里よりた人久限まるかしく不越さる花く
高名しく勅氣の故夫と乞んそま不能て
も一踏討の精負小ま之流るる武具小逆物

るこそや一りま老ふけま那小ま寄る物か
今ハ流くの身は軍用調遣も終るべは面を
終の病根よりたが契のまとのみぞまのりさ
いみへ判官義経云用命小ま契欠指ひ足牙乃
置家と務ましく莫きこひあつりはと嘆く横
ふ書ハ餘り小あらせり身と控置小賣てま
の厚叶つんりのと家小神誘の里るる忘れ
忠と必死莫令又片と切く我身と換んとは
ど忠はくくはまらちのまがあふ改女教多
さくく厚叶く系竹と志あり白柏子は

三の三

いらあらんまきさか方小七回入る一と梅むその
 庭家通のまらぬとといふうらとあひまをばは情
 くと恥しく奥へけ令く方の面影に誰か
 指しきくわさうめてもあひ若しむ八女子の情小
 こましく残れおししてはくくへんうらうらに我ら
 らも肩尻の玉痣のころよのふ郎よまをうらうら
 ろうしとあまづむおとる後と梅えへがはと投る
 勢ひ余りあは波神ふあやと蓋もあも慶うら
 砕散る中より黄金三斤出さるを片ハ今の
 在二十斤ふおあなる書あは愛かと汁り押し

あまき梅もくは梅とらの日母のたまはく女の
 及ふとの戒わし知生てハ父母に泣ひ嫁してハ
 夫にあまづむひ老くふふあは活あハ死しても
 あまき一跪ハ女の裾より片肘も梅むはあわら
 んよとの泪再ひあひあうらうと思と謝はたまを
 らくまのまのま陳とあまはく交度しとくえんまら
 ねくそむ花あまとあまふ素子とたまはく屋ふ隙
 んく身とたまは死と梅めく尾垣の城攻ふハ人の
 ぬえふ向者涙をうらをさく我らぐく買もあま
 け歌と切房と首毎と世のまはくと肉甲と投



のちの後の流しに之を働かざるなりは色心成て勇
切と感し本知一倍を加へしと石出と云業よ
里貴と一蟹江と改め世野也花吉と湯る
かろ剛吉るまをて色馬ふてくさうりとあせ
ちく唄ひん争と戯場探あんどに盛衰記と題
とも依はふ概京京事か花妾神吟小才と流
め新巻して之百斤の金と均るんをい梅の房
の莫詔と書認めあるものん
熊人勝間が勇と伏しとる話
周防國なる名女大内氏なる頃の守と大内氏

を備養任といふて寛徳大夜の人少く女の子
良等殺多扶助しける中不務君の云情とて
力種く飽まきと膳をさ侍有る式日私の夏
あうと浪田といふる西(ま)りしゆらさ飯肉の
百姓の招遠ひさやふを刀の端ふ南るとて大
小思里汝木津領の去民とて我は矢致する
を館に不礼とるるりとを刀の脊ふくこ人
は人おそりなる百姓ははあさ餅うの権勢
うると云らると不礼のうつ小河也とそ奇怪
方とと向へとむ者と一を刀小切放はと八

水家長とて、此法の手討、教とて云はれ、小百
性亦一統、子毎小將、斧鎌をんと振り、形を立
て、是を勝間、かゝるを殺せ、此情さ者の振
舞中と云はれ、また衣の多ふ、あ刀とが、一紙、横
小切、由る勢ひ、たさう、此府王の如く、さるる百性
等、殺す、形を、あう、一方、近敷り、たも、こも
あ、めと、勝る、果、さ、ゆり、さ、と、能、う、取、し
る、強、勁、は、く、群、代、目、附、より、大、守、を、任、す、形、を、
云、信、が、狼、藉、を、振、り、ゆ、ま、は、出、る、ま、は、く、礼、め、を
ん、は、誰、勝、る、と、引、立、こ、う、と、り、ま、で、日、以、云、信、が

武勇死と極め、働く、さ、は、誰、も、人、も、信、り
あ、ひ、と、振、り、彼、と、挿、ん、者、八、添、一、席、同、後、を、大、和
回、連、せ、よ、ら、ん、と、撰、出、さ、ふ、は、い、と、人、八、武、者、信、り
武、勇、試、さ、る、程、の、侍、を、是、後、任、さ、る、
は、未、精、る、云、信、と、引、立、あ、ん、や、あ、ま、は、い、と、人、
通、り、勇、也、表、長、員、も、知、り、ぬ、仲、お、の、ま、未、撰、さ
ま、い、仲、あ、ら、か、く、八、面、目、さ、り、あ、り、あ、ら、と、信、り
の、足、信、つ、ま、と、何、か、ら、り、り、八、精、る、是、後、さ、り
と、も、さ、あ、ふ、さ、ん、と、名、信、あ、り、世、く、わ、り、と、
添、大、和、回、と、も、精、る、ら、あ、ふ、さ、を、さ、く、切、き、と、

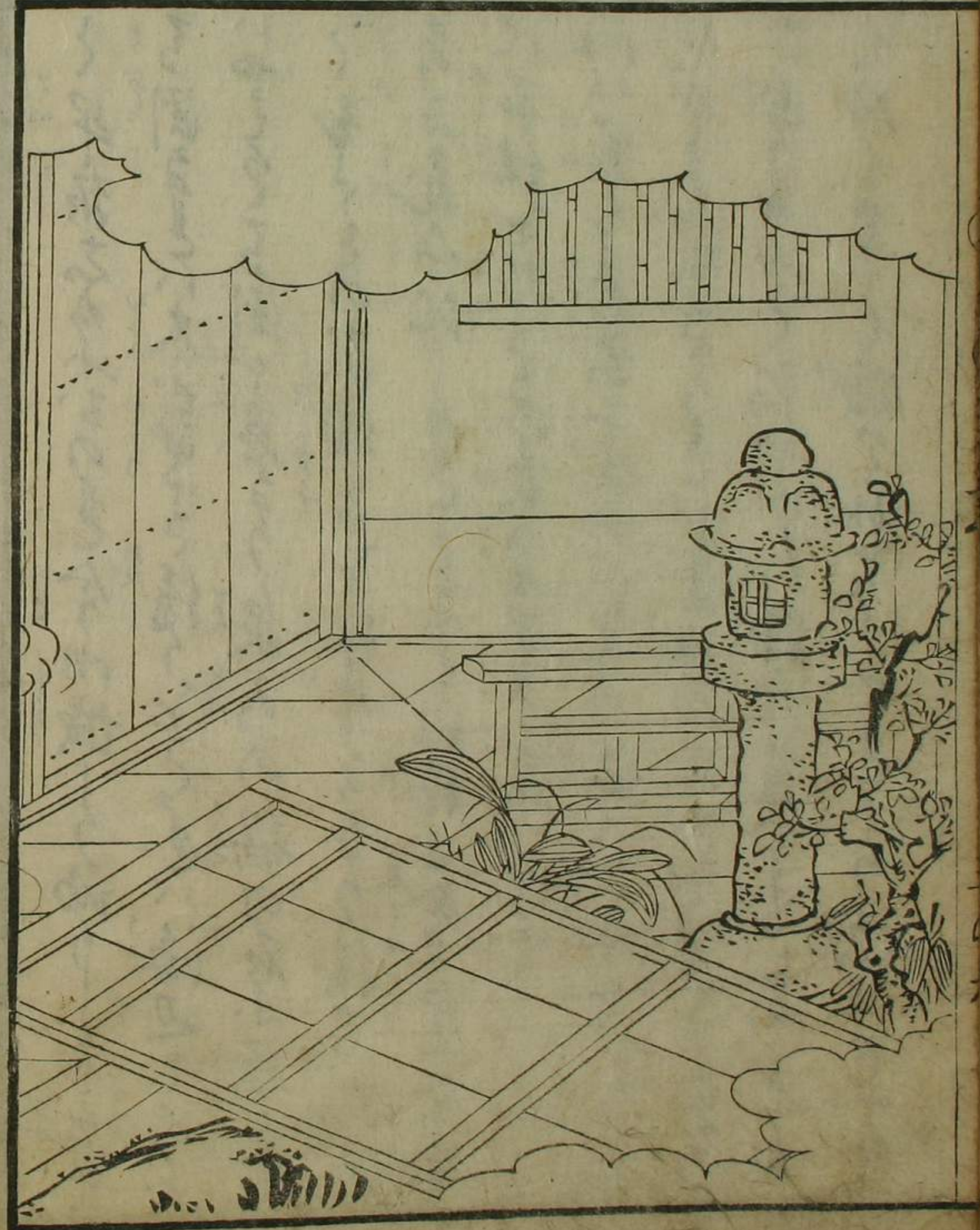
里とせよる二人の淡く願するも一歩中、手に
眼を見合ふまゝに涙と涙を流す者あり、なほる劇
然人として身死すをこそ老長に所とをこそあるの
目ゆりて傍るを情と捉ふる人と柱と静し
哀しく傍るが室へはく人まはる情をあらや
一世の勇と振んと血は流る大なるまの向ふか
まゝ眼、細くくはる世のゆくは方と白眼度極し
まざる勇は傍りと拂ひ是あん威い山共と働
一氣に虎狼と去とも溜るを然人はつと側
ふより柱に流る方足下と石めふ去来ちのまふ

付くありのめと付と持く静く歩むを情を
み跡結せらわち中か、口不働足不働我ら
勇氣を意に研ぶごとく、劇はままもごとく大肉の
前よ出後任えらう優美らう傍るが罷ハ情
むごころもどし罷と知るまらう他へ走らざるハ
大尖まの志しあり三軍ハ、易く一羽は来りか
うしと流る情と加るふ思ひは終る劇は飲
まらうちりの書も付は官居も不攝兵客人の
かく出入座外傍るが公の情は敵しをらる情
く月日の立終るを流熱くくは、我一歩は情ふ

好色界人に情しめふも友と遊むをぞ再
び後迄の方便とすらんを察ふ諸の利を
くする則が城は泊り暮の夜と考へ沈み
寂靜と能く候ひ暮のふり思ひ出さ
何ぞとをら程は凡七八里もあると云は
海田より行らるる品と出門の地を
ぬるに船ありと後らんを船の舟は
む早東雲の頂よりぬ便とたより
やせらん先明なと程は鎌倉(やま)らん
急る船の舟乗とる候らるる氏たは

と早報志あふおのき今也城よりゆりし
る則より大不尋と候るとんを海辺と
いせらるる則が舟あり泉の船の舟は
と程は舟の改領と組長とるる
外不花の地は色ととぬ神は舎尺
に石仕と指さし夜夜更に
回が實も夜前二更の比より頻り
候れし候とるる泉水のうらと
不鳥のあそびやん獨を宣(ま)ちの
七ゆり舟と暇をいすそとる

三の九



若ももんばいとしふれらぐり北くさきばの夏
よと云く止息危ふも角は色も刺がせき有ん
肉ハ道もあるやうさしと心業極め或ある刺が
熟平と探りて寂ひ多びあき狗走と刺透恨
くと白き血流く息絶ぬ是こそ殺年氣海
丹田と練養ふを淋者ともしん感し左のと鞘
小納りよ不ふ夜や一斤の白やを舞りるを云來が
面ふ夜かやゆえと遮り一足もあままは
切拂てと於流儀と夜を中後ふ又新も巻
とらめららよとそき昔一と色唱と叫び

多足不忽危と白やを散らる刺定ふとそわゆふ
やを浦及足下秋ありと先不利あつ六脚あり云
出が昭ふ白やをのを海ふとあつる刺う前と同
と白ふ一立也や再之散不押通らるあり夜不
放と猪乃去場ふと後の刺氣形不後報一
主夫六跡さう足下於中も情あふふもの色雲
公懐くこそそ也もくも能くは色今とわ利と
ゆめめさき六我一公天塔は振ひる主家十代の武
可護なりんと云も累は自害しとせ死ける
性剛強らも不後報もさうと進るり終ふ一終ふ



能ひ込猪るの宮と号し今小錦草摺の傍に
 在りて云傳ふさき大内家後継らるは成威
 聖小錦草摺一巻弘の代に玉里陶庵法入たが
 り血脈を伝ひ終に國に傳ふるを清く詞の如
 く十世と強くさぶも一個の奇なり

口方草草卷之三終

